

めあげることができる。したがって、「占いの女性化」がいつ、なぜ生じたのかが明らかにされなくてはならない。ともすると、我々は自明的に「占いは女のもの」とみなし、客にしる占い師にしる女性が多いことを当然のことと考えがちかもしれない。しかしながら、「占いは女のもの」ということを説明する研究は皆無に等しい。我々が自明的にそう思っているのにしかすぎないのである。例えば占い師に関して、対馬路人による一九八五年の「石切神社」参道における占い師の調査は、9人中6人が男性の占い師であったことを報告している。これはある地域における事例および「占い師」に限定されたものであるけれど、ここから単純に〈占いは女のもの〉であると断言しえないだろう。対馬の調査から11年後の一九九六年に筆者がおこなった調査では聴き取りをした占い師の17人中16人が女性であり（一九九六年現在「石切」に40人以上の占い師がおり、そのほとんどが女性である）、「占いの女性化」を示しているのも事実である。しかし、時期や原因を特定化しえているわけではない。また上で見た意識調査の結果から、「男性よりも女性の方が占いを受容しているではないか」とする反論があるかもしれない。確かに、調査結果から当該時点における女性の占いの受容は言えるだろう。だが、その調査結果は、当然、その調査がされた以前のことを示してはくれない。言い換えると、いつそしてなぜ、女性が占いを受容したのかを、我々はその結果からは知りえないのである。このことを明らかにするには、資料の掘り起こし作業が必要であり、今後の課題としよう。

参考文献

- 石井研士『データブック現代日本人の宗教』新曜社 一九九七年
 NHK 世論調査部編『日本人の宗教意識』日本放送出版協会 一九八四年
 種田博之「『石切神社』参道における占い師の実態—1985年と1996年との比較—」『民俗宗教の動態—生

- 駒宗教調査—』1995・96年年度科学研究費用補助金研究成果報告書 研究代表者 村田充八 一九九七年
 対馬路人「石切神社参道における運命鑑定業の実態」『日本宗教の複合的構造と都市住民の宗教行動に関する実証的研究—生駒宗教調査—』昭和60・61年度科学研究費用補助金研究成果報告書 研究代表者 塩原勉 一九八七年
 露木まさひろ『占い師!』社会思想社 一九九三年
 宮本靖子「女子高生占い調査 彼女たちは、果たして占いへと走ったのか」『月刊アクロス』1990年12月号 パルコ出版 一九九〇年
 山下嘉範『占い最前線』神戸新聞出版センター 一九八五年

19) 〈占いの街〉のある責任者は、客としてがどうしても女性が多いので占い師も女性が多くなると、述べている。また、異性の占い師に占ってもらよりも、同性の方がより安心して占ってもらえると、客が考えていると責任者はみなしている。別の見方をすれば、女性たちは占いをしているというよりも、人生における同性の先輩にまさしく相談している感覚に近いのかもしれない。そのためか、神戸の〈占いの街〉の店舗の男性の占い師は、いかつた人であったり、「男性」性が表面に出ている人ではなく、中性的になるか、もしくは極めて優しくソフトな風貌の人である場合が多いそうである。